水辺の生命と暮らしのネットワーク――ラムサール・ネットワーク日本
ラムネットJニュースレター
Ramnet-J NEWSLETTER
Vol.56 2024年8月9日発行

NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本
（略称：ラムネットJ）
〒110-0016
東京都台東区台東1−12−11 青木ビル3F
TEL/FAX 03-3834-6566
電子メール info@ramnet-j.org
ウェブサイト https://www.ramnet-j.org

小山市に湿地関係者が集合
ラムネットJ 15周年記念講演会

ラムネットJ理事 原野好正

2024年6月15日、栃木県小山市でラムネットJ設立15周年記念講演会「湿地からはじまる 自然のつながり×人のつながり」が開催されました。会場の小山市立生涯学習センターのホールには、小山市民をはじめ全国各地から湿地の保全・賢明な利用に関わる関係者が集まり、2つの基調講演と4つの報告に耳を傾けました。

最初の基調講演は、柏木実さん（ラムネットJ理事）による「シギやチドリたちから見た渡良瀬、日本の湿地、世界の湿地―その長距離の渡りと私たち―」。柏木さんがシギ・チドリ類に興味を持ったきっかけと、保全活動にどのように関わってきたのかが語られました。

柏木さんによると、シギやチドリは万葉集や和歌にも詠まれ、「千鳥足」などという言葉が日常的に使われるように、日本では古くから親しまれてきた一方、その生態はよく知られてはおらず、個体数がどんどん減少しています。シギ・チドリ類は、北半球の北極圏を含む地域で夏に繁殖し、冬になる前に渡りをはじめ、中継地を経て、越冬地である赤道・南半球へと長距離を移動します。中継地である日本の干潟は、シギ・チドリ類にとっては渡りで消耗した体力を回復する栄養分を補給する重要な場所。シギ・チドリ類の個体数は、1970年代から2000年代にかけて激減し、その後も緩やかに減少しつづけています。その大きな原因の1つは、高度経済成長に伴う干潟の干拓・埋め立てであることは明らかです。日本の干潟を保全・再生することは、日本だけでなく世界共通の課題です。内陸湿地である渡良瀬遊水地やその周辺河川や水田、米作と麦作の合間に水を張る「夏期湛水管理（なつみずたんぼ）」などは、シギ・チドリ類の保全・再生にも意義のあることだと、柏木さんは指摘します。

会場の様子（上）

基調講演を行ったラムネットJ理事の柏木実さん（左）と呉地正行さん（右）

2つ目の基調講演は、呉地正行さん（日本雁を保護する会会長／ラムネットJ理事）による「ガンが渡る風景をもう一度」。

ガンも万葉集や枕草子にも登場する渡り鳥で、襖絵（ふすまえ）や浮世絵などのモチーフにもなってきたように、日本では「ガンのいる風景」が日常的なものでした。しかし、高度経済成長を経て、日本に飛来するガンは激減していきます。その原因の1つが、ガンのねぐらとなる湿地の減少です。湿地の管理方法の見直しや「ふゆみずたんぼ」の導入など、失われたねぐらを再生する取り組みの事例が、呉地さんから報告されました。

また、日本に飛来するガンの一種であるシジュウカラガンは、繁殖地である千島で毛皮採取用のキツネの放牧が行われたことで、絶滅の危機を迎えました。しかし、呉地さんをはじめとする日本の環境活動家と海外の研究者が協働して、人工繁殖と放鳥、越冬地の復元などに取り組んだ結果、その個体数が回復しつつあるとのこと。さらに、宮城県の高校生が展開するシジュウカラガン復活プロジェクトなど、最新の情報も共有されました。

絵本作家のキム・ファンさんの報告

基調講演に続いて行われた報告は、徳島県吉野川の取り組み、沖縄県の開発問題、ユース目線からの将来世代参画の意義、絵本を用いた環境学習の4つ。

最後の報告となった、絵本作家のキム・ファンさんの報告では、環境教育に絵本や紙芝居を取り入れることで、幅広い年齢層に「共感」が生まれるとして、キム・ファンさん作の絵本『カヤネズミのおかあさん』などを紙芝居で実演。会場は大きな共感に包まれました。

ラムサール・ネットワーク日本 15周年記念講演会
湿地からはじまる 自然のつながり×人のつながり
《プログラム》

■基調講演
- 「シギやチドリたちから見た渡良瀬、日本の湿地、世界の湿地―その長距離の渡りと私たち―」
  柏木 実（ラムネットJ理事）
- 「ガンが渡る風景をもう一度」
  呉地正行（日本雁を保護する会会長／ラムネットJ理事）

■報告
- 「吉野川河口域のシオマネキを守るとりくみ」
  井口利枝子（とくしま自然観察の会／ラムネットJ理事）
- 「沖縄県における開発計画と湿地への影響」
  砂川かおり（沖縄国際大学／ラムネットJ理事）
- 「ユースの目線から見た将来世代参画の意義」
  稲場一華（国際自然保護連合（IUCN）日本委員会事務局／ユースコーディネーター）
- 「環境学習にもっと物語を！」キム・ファン（絵本作家）

台湾で出会った多彩な田んぼ、文化、そして人々

ラムネットJ理事　呉地正行

2024年5月5～12日に、台湾を訪問する機会がありました。その目的は、ラムネットJが実施中の「田んぼの生物・文化多様性2030年」の一環で、アジアを代表する湿地としての田んぼが、台湾でどのように扱われているのかを、生物多様性と水田文化の両面から学ぶことでした。訪問計画はこれまでに交流があった、台南野鳥の会／レンカク生態教育園区公園の李文珍さんと、政府機関の花蓮区農業改良場の林立さんに作っていただき、台湾の北、東、南、西部の8地域22地点を訪問することができました（**図1**）。各地点での活動主体は、NGO、政府・自治体、企業、原住民など多彩でしたが、その中から数例を紹介します。

図1　台湾での訪問地点

最初に訪れた貢寮（ごんりゃお）地区（A）では、NGOの人禾環境倫理發展基金會が、旧小学校を事務所として多様な活動を行っていました。棚田ではその復田と水牛を使った伝統的な農法の拡大をめざし、景観の維持・管理を行いながら、田んぼの生物多様性の向上と農業文化の復元に尽力していました。また渡り鳥の重要な中継地となっている湿地とその隣接水田では、台湾野鳥の会、農業関係者と協働し、渡り鳥を活かしたお米をブランド化して販売していました。若者が多く、地元自治体の政策策定にも関わり、絶滅危惧種のランの復元にも取り組み、健全な棚田景観全体を取り戻そうという強い思いが伝わってきました（**図2**）。

図2　貢寮地区の棚田と人禾環境倫理發展基金會のメンバーと共に

宜蘭（いらん）（B）では、水鳥に配慮した農法の米を農家から買い取る会社が、養魚場の所有者と契約し、水鳥の渡りの時期に養魚場の水を抜いて干潟状にし、シギチドリ類などの生息地を創出する取り組みも行われていました。

4月に大地震が起きた、花蓮（C）では、行政院農業委員会の花蓮区農業改良場と農林務局が主導して、花蓮県各地の原住民族の取り組みを支援していました。農業改良場には、原住民與機能性作物研究室があり、原住民族の伝統的作物の栽培支援を行っています。台湾全土には16部族60万人の原住民族がいますが、1997年に、憲法に「国家は多元文化を肯定し、積極的に原住民族の言語文化を護り発展させる」という文言が盛り込まれ、現在の台湾では原住民族の言語・文化などの復興が盛んに行われるようになりました。社会でも彼らが堂々と原住民族と名乗れる状況になってきています。今回訪問した花蓮市の南安（らむあん）は、台湾の最高峰の玉山（新高山）の山裾の集落で、希少種のタイワングマも生息しています。ここで原住民族の人たちが、農業改良場と協働して有機農業を行い、希少種の淡水魚・キクチヒナモロコに配慮した水辺や水路の設置や、在来植物で畔（あぜ）を覆い、外来種の水田への侵入を防ぐ取り組みとそのブランド米の販売が行われていました（**図3**）。

図3　南安地区の原住民族と花蓮農業改良場のメンバーと共に

今回は台湾の田んぼを軸とした多様な文化にも触れることができました。この紙面では紹介しきれませんが、行く先々で出会った地域資源を活かした多彩で豊かな食文化が、特に印象に残りました。

湿地のグリーンウェイブ2024 イベント報告

自然とのふれ合いを楽しむ「湖西親子体験教室」

湖西フロンティア倶楽部　片山愛司

湖西フロンティア倶楽部は、浜名湖の西側にある湖西市の北部で活動している会員数39人の市民団体で、地域の活性化を目指して、青年団OBが主体となって1992年4月に設立しました。自然保護活動、青少年リーダーの育成、地域文化の継承や地域内の各種団体の連携による住みやすい地域づくりの活動に積極的に取り組んでいる団体です。「先人の知恵から学び、取り組み、持続・発展する里山の取り組み」を行いながら、「自然の恵みを生かし、楽しむ、おちばの里づくり」を目指しています。その中で、浜名湖の豊かな自然を育む森づくりや湖岸のヨシ刈りにも取り組んでいます。

本年度5月5日の「こどもの日」には、親子で自然のよさを知ったり自然の中での家族のふれあいの大切さを実感したりすることを目的とした「湖西親子体験教室」を実施しました。静岡県湖西市大知波にある「おちばの里親水公園」で、130匹のこいのぼりが泳ぐ中で、国有林や静岡県立浜名湖自然公園に接する公園で、川遊びをしたり、自然素材を使ったクラフトや生き物展示などに親しんだりしながら、450人が家族とのふれあいを楽しむことができました。

今川での水遊び（5月5日）

生き物コーナー（5月5日）

この公園の脇を流れる二級河川の「今川」は、湖西連峰の森林に降り注いだ雨水が浜名湖に流れ込むことから、浜名湖にとっては栄養分のある水を供給する大変重要な役割を担っている川です。この川には、アユをはじめ、ウナギやナガレホトケドジョウ（絶滅危惧ⅠB類）、カワムツなどの清流に生息する生き物が多数見られます。

森づくりによって豊かな浜名湖の自然が守られていることを学ぶ場として、8月に実施している「湖西親子体験教室（親子で浜名湖を知ろう）」があります。汽水湖である浜名湖は、国内で10番目の面積で、周囲の長さは3番目という複雑な形をしている湖です。ここには、日本有数の「アマモ場」が広がり、豊かな生態系をつくっています。このアマモ場で、親子で生き物観察をすることで、自然のおもしろさ、楽しさ、不思議さを学びながら、浜名湖の豊かな自然を実感し、保護・保全の意識を高めています。

■湖西親子体験教室
主　催：湖西フロンティア倶楽部
日　時：5月5日（日）10：00～
場　所：おちばの里親水公園（湖西市）
参加者：450名

湿地巡り

福島潟（新潟県）

志民委員会潟部会　平岩史行

福島潟は、新潟砂丘により阿賀野川等の河川の流れが遮られ、砂丘列の内陸側に徐々に土砂が堆積して形成されました。現在は約2・6㎢あり、新潟市の中で最も大きな潟です。潟の浅い水域にはヨシ帯が島状に広がり、越後平野の原風景を思わせ、春には整備された菜の花畑と雪をかぶった山々が潟の景色を彩り、四季折々の風景を見ることができます。220種以上の野鳥が飛来し、470種類以上の植物が確認されている自然豊かなところで、国の天然記念物であるオオヒシクイの越冬地でもあり、オニバスが自生する国内の最北限とも言われています。

潟の北側には、潟と五頭山地を望むことができる水の駅「ビュー福島潟」と呼ばれる情報発信施設や、野鳥を観察できる「雁晴れ舎」、葦葺き古民家を再現した休憩施設「潟来亭」があり、自然を感じて歩くことができる遊歩道もあります。季節や時間帯によって菜の花、ハス、オニバス、さまざまな鳥の鳴き声、潟が見せてくれるさまざまな表情に出会うことができます。

福島潟の全景と水の駅「ビュー福島」

サワオグルマ

オオヒシクイ（左）とコハクチョウ

福島潟周辺には、福島潟の干拓を中心に蒲原平野の開発に努め、県内有数の大地主として、北越屈指の豪農となった市島家の「市島邸」や、福島潟を中心とした低湿地帯の暮らしぶりがわかる民俗資料を見ることができる「北区郷土博物館」、新潟水俣病と水環境をテーマにした施設「人間と環境のふれあい館～新潟水俣病資料館～」があります。

福島潟は、自然だけではなく、人の営みや歴史に触れることができる潟でもあります。このような特徴を持つ潟には、自然や野鳥を守る活動や、福島潟の美しさを伝える活動があり、地域住民も参加しています。干拓された場所を再び潟に戻す事業も行われています。また、「福島潟自然文化祭」や「福島潟マルシェ」というイベントもあります。これらの素晴らしい活動がある中ですが、より多くの市民に親しまれ、潟を身近な存在として感じてもらい、日常的に潟に来てもらえる一助になるような取り組みをしたいと考えています。

報告

第18回 日韓NGO湿地フォーラム

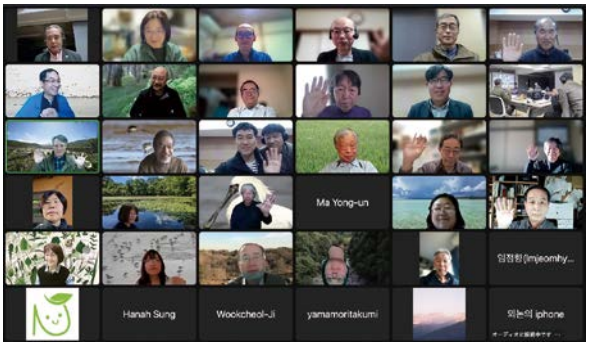
ラムネットJ共同代表　永井光弘

日韓NGO湿地フォーラムは、日本のラムネットJと韓国の韓国湿地NGOネットワーク（KWNN）が毎年交替で主催しています。本年（2023年度）は、韓国側の主催によりオンライン形式で2024年4月13日に行われました。湿地の喪失を食い止めるために両国の「環境アセスメント制度」は機能しているかをテーマとして、報告とディスカッションが行われました。

日本側からは、岡山県・玉島ハーバーアイランド事例（西井弥生さん）、愛知県・藤前干潟事例（亀井浩次さん）、沖縄県・泡瀬干潟、辺野古、浦添の事例（安部真理子さん）の報告がされました。韓国側からは、コジェ南部観光団地開発事例（ウォン・ジョンテさん）、ナクトンガン河口の橋梁建設・カドク島新空港建設事例（パク・チュンロクさん）、ソラク山のケーブルカー事例（チョン・ギュソクさん）の報告がされました。

これを受け、韓国側はチャン・ヨンチャンさん（慶南大学校兼任教授）から、韓国の環境アセスが、開発前提でその環境影響評価をするに過ぎない点、実際の環境影響評価も事業者主導で費用も低廉に抑えられている点、そもそも環境が公共財であるとの発想がない点などを指摘し、韓国のアセス制度を無用のものと痛烈に批判する議論がされました。日本側は、大久保規子さん（大阪大学大学院教授）から、日本のアセス制度も、事業の可否に関する戦略的アセスが欠けていること、事業の累積的影響を評価できていないこと、代替案も非現実的なものが多く、市民参加制度も弱いなど、やはり機能不全となっていることが指摘されました。そのうえで、諸外国では、干潟そのものに権利を認める例もあること（スペインのマール・メノール法）、ヨーロッパでは、環境に関する情報へのアクセス、意思決定への市民参加、司法へのアクセスの保障を推進するオーフス条約が広く批准されていることが紹介されました。

両国とも、環境アセス制度は改善の余地があり、各政府に改善を働きかけることや、海外の動きを参考により良い制度としていく努力の重要性が再確認されたフォーラムでした。



フォーラムにオンラインで参加された皆さん

ラムサール条約事務局長とNGOの会合

ラムサール条約事務局長ムソンダ・ムンバ博士が来日し、5月17日に環境省会議室にてNGOとの会合の時間が設けられました。出席したNGOは、ラムネットJ、日本国際湿地保全連合、ラムサールセンター、チームスプーン、日本雁を保護する会、日本ツル・コウノトリネットワークです（**下写真**）。ラムネットJは与えられた8分間で2つ提案をしました。政府が条約事務局に提出する「国別報告書」のセクション4（国家目標の達成状況）を任意ではなく必須にして欲しいこと、そして、ラムサール条約とオーフス条約との連携を具体的に進めて欲しいことです。

ラムサール・ネットワーク日本 2024年総会報告

ラムネットJは2024年通常総会を6月15日に栃木県小山市の生涯学習センターギャラリー室とオンラインで開催しました。議案として、2023年度の事業報告と収支決算（左表「活動計算書」参照）、2024年度の事業計画と収支予算、2021－2024年短期計画の3年目の達成度報告、2024年度の役員人事が承認されました。

2023年度は前年度から企画交渉を続けていた「渡良瀬プロジェクト」がスタートしました。また、従前は年に1本であった環境省からの翻訳業務が2本に増え翻訳チームは多忙な年でした。

役員人事では、ふくおか湿地保全研究会の勝野陽子さんに代わって同団体の小山内朝香さんが理事に就任しました。また、これまで日韓NGO湿地フォーラム等で通訳者として関わってくれていたキム・ファンさんが新しく理事に就任しました。そして、仕事の都合で理事を一時退任していた丸山明子さんが再び就任しました。

総会の詳細はウェブサイトの「組織概要」に掲載している議案書をご覧ください。

2024年度 ラムネットJ役員一覧（○印は今回就任した役員）

代表理事	金井　裕	理　事	陣内　隆之
代表理事	永井　光弘	理　事	菅波　完
理事（事務局長）	後藤　尚味	理　事	砂川かおり
理事（事務局次長）	安部真理子	理　事	高野　茂樹
理　事	浅野　正富	理　事	田中　博
理　事	安藤よしの	理　事	西井　弥生
理　事	井口利枝子	理　事	服部　卓朗
理　事○	小山内朝香	理　事	原野　好正
理　事	柏木　実	理　事	舩橋　玲二
理　事	亀井　浩次	理　事	松本　悟
理　事○	キム・ファン	理　事○	丸山　明子
理　事	呉地　正行	監　事	嶋田　久夫
理　事	佐竹　節夫	監　事	堀　良一

インフォメーション Information

●瀬戸内海における藻場・干潟分布状況調査　環境省は衛星画像の解析手法による瀬戸内海の藻場・干潟の分布状況調査を2022～2023年度の2年間で実施し、その結果を7月9日に公表しました。今回の調査では藻場面積は1万6963ha、干潟面積は1万1971haでした。2015～2017年度の調査と比較し、藻場は9％、干潟は8％増加したとのことです。詳しくは以下のウェブサイトを参照してください。https://www.env.go.jp/press/press_03391.html

●ラムネットJのウェブサイトがリニューアル　デザインを一新したほか、デバイスのモニターサイズに応じて表示が切り替わる機能により、タブレットやスマートホンでも読みやすくなりました。また英語によるラムネットJの説明ページも新設しました。トップページのURLはこれまでと変わりません。リニューアル前のコンテンツにも以前のURLでアクセスできます。

新しいウェブサイトのトップページ

2023年度　活動計算書　（単位：円）
※2023年4月1日から2024年3月31日まで

経常収益	
受取会費	937,000
受取寄付金（企業協賛金含む）	9,472,482
受取助成金等	4,323,522
事業収益	1,893,000
その他収益（受取利息等）	133
〃　（為替差益）	4,306,000
経常収益計	20,932,137
経常費用	
1　事業費	
(1) 調査研究事業	147,705
(2) 保全・再生事業	5,867,603
(3) 普及・啓発事業	3,440
(4) 国際協力事業	1,438,078
(5) ネットワーク推進事業	267,844
(6) その他の事業	0
事業費計	7,724,670
2　管理費	
（人件費）	
賃金・福利厚生費	170,576
（その他経費）	
事務委託費	785,880
印刷製本費	65,281
旅費交通費	281,462
通信運搬費	123,616
消耗品費	30,849
水道光熱費	36,000
地代家賃	312,000
賃借料	8,000
接待交際費	16,500
租税公課	600
支払手数料	23,040
管理費計	1,853,804
経常費用合計	9,578,474
経常外収益　過年度損益修正益	113,821
経常外費用　過年度損益修正損	22,548
当期増減額	11,444,936
前期繰越額	3,633,866
次期繰越額	15,078,802

ラムサール・ネットワーク日本　会員募集 !!

ラムサール・ネットワーク日本（ラムネットJ）の活動は、会員の皆様からの会費や、カンパ、助成金などでまかなっています。ぜひ、ラムネットJのサポーター（一般賛助会員）になって会の活動を支援してください。もっと積極的に湿地保護にかかわりたい方は、会の運営や活動を担う一般正会員としての入会をお待ちしています。そのほか、団体や企業としての入会も可能です。詳しくは事務局までお問い合わせください。

会員の特典

機関誌「ラムネットJニュースレター」を送付するほか、会員限定のメーリングリストに参加できます。ラムネットJが主催する催しの参加費が割引になる場合もあります。

入会申込方法

●郵便振替　郵便振替用紙（払込取扱票）の通信欄に、ご希望の会員種別、お名前、住所、電話番号、Eメールアドレスをご記入の上、年会費をお振り込みください。一般銀行から振り込む場合は（払込取扱票への記入ができませんので）振り込み後に上記の申込事項をEメール、FAX、郵便等で右記の事務局までお知らせください。

●ウェブサイト　一般賛助会員、一般正会員については、ウェブサイトからオンラインでの入会も可能です。https://www.ramnet-j.org/join/ にアクセスし、「入会申込フォーム」に記入して送信してください。年会費は郵便振替でご送金いただくか、オンライン決済サイトSyncable（シンカブル）からクレジットカードで送金することも可能です。

振　込　先

ゆうちょ銀行　振替口座 00140-0-765702　ラムサール・ネットワーク日本
（一般銀行から）ゆうちょ銀行　〇一九（ゼロイチキュウ）店
当座預金 0765702　ラムサール　ネットワークニホン

会員種別と入会申込金（年会費）

会員種別	正会員	賛助会員
	総会での議決権があります	総会での議決権がありません
一　般	1口　5,000円	1口　2,000円
団　体	1口　10,000円	1口　10,000円
特　別	50,000円 以上	30,000円 以上
企　業	－	1口100,000円

年会費（入会金）

年会費は毎年4月から翌年3月までの1年分です。入会初年度は、年度途中の入会でも入会金として1年分の会費をいただきます。2～3月に入会の場合、初年度の年会費（入会金）は無料となり、4月からの次年度の年会費としていただきます。

事　務　局

NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本
〒110-0016 東京都台東区台東1－12－11
青木ビル3F　TEL/FAX 03-3834-6566
Eメール info@ramnet-j.org